

「川といきる」「村をひらく」「農をおこす」 ——岩見沢市北村発『北村の記憶』から見えてくる北海道

第2回 「村をひらく」

ノンフィクションライター、「ほっかいどう学 新聞」編集人

北室 かず子 (きたむろ かずこ)

1962年徳島県出身。筑波大学比較文化学類卒業後、婦人画報社(現ハースト婦人画報社)に入社し、女性月刊誌の編集に携わる。91年からJR北海道車内広報誌『THE JR Hokkaido』特集を30年にわたり企画・取材・執筆中。著書：『赤れんが庁舎物語』(北海道文化財保護協会)、『北の靴ものがたり—いたがきの職人魂』(北海道新聞社)など。

北村雄治の華麗なる人脈



『北村の記憶』北村地域農泊推進協議会発行。北村温泉HP (<https://kitamuraonsen.com>)で公開中。

冊子『北村の記憶』(北村地域農泊推進協議会発行・村田文江監修)を手掛かりに北村の地域史をたどると、北海道近代史を象徴する事象が多くあることがわかります。前回の「川といきる」で述べたように、北海道内陸開発において石狩川が重要な役割を果たしたこと、その一方で、流域の人々が水害と闘い続けてきたこと、そして捷水路や放水地という“目に見えないインフラ”によって流域を守る取り組みが営々と続けられていること。それは北村に限らず、広い石狩川流域に共通することでした。第2回は村名の由来となった北村雄治と弟の**龍、謹**が、いかに村を作ったのか、彼らが起こしたイノベーションをご紹介します。前回の宿題、「北村」村とならなかった理由も！

北村雄治は、1871(明治4)年、山梨県中巨摩郡鏡中条村(現・南アルプス市)に生まれました。16歳のときに父が急死し、家業の酒造業を継ぎましたが、2年続きの火事に遭い「国家・社会のために有意義な仕事をしたい」と考えるようになります。そこで漢学の



北村雄治 (1871～1903)

師の芳野世経(元東京府会議長、衆議院議員)に相談したところ、富田鐵之助(当時の東京府知事)を紹介されました。富田は「北海道開拓こそが国の急務であり、優秀な人材を求めている」と雄治に説き、北海道長官への着任を控える北垣国道(元京都府知事)に引き合わせました。この出会いから雄治は北海道開拓を決意します。VIPがゾロゾロ登場していますが、雄治のスゴさはまだまだこれからです。

雄治は1894(明治27)年4月8日、山梨県で募集に応じた小作人たちと共に開墾の第一歩を踏み出しました。それが、道庁から肥沃な土地柄と紹介された岩見沢村狐森でした。当時はまだ稲作のための基盤整備など皆無で、雄治は鏡沼に蒸気機関を動力とする米国製揚水機を設置し、これで水を汲み上げ、水田耕作に挑戦します。『北村百年史』によると機械力による揚水で水田耕作を試みたのは日本初だとか！揚水機設備は現在の貨幣価値で数千万円もしますが、雄治は、鉄道会社や電灯会社の経営、株式売買の利益を農場経営に回しました。原野のまっただなかを開墾する身でなぜそんなことができたのでしょうか。それは、「甲州財閥」と呼ばれた山梨県出身の実業家ネットワークに属して

いたからです。甲州財閥の基本は同郷の絆で、明治中期～昭和初期、鉄道、電力、証券金融会社の設立・買収を協力して行いました。その一人が根津嘉一郎です。200余社の創設・経営にあたりながら茶人としても知られ、古美術品コレクションが根津美術館（東京都港区南青山）となっています。根津は雄治と弟の暲を、公私にわたって支え続けました。

なぜ、「北村」村でないのか

そんななか1898（明治31）年9月、石狩川大洪水が起きます。国の被災者生活支援は岩見沢村の役場によって行われましたが、狐森、幌達布、美唄達布地区は役場から遠く、対応が後手に回ってしまい、住民の不満が募りました。それをきっかけとして岩見沢村からの独立の機運が高まります。そして1900（明治33）年6月13日、「北村と称す」と北海道庁が告示し、7月1日、北村戸長場が開庁しました。

さて、ここで前回の宿題です。開拓の範となった米国に、ジョージ・ワシントン大統領→ワシントンD.C.があるように、北海道には、伊達邦成→「伊達」市、月形潔→「月形」町、仁木竹吉→「仁木」町、京極高德→「京極」町と、開拓功労者の名が町名となったところがいくつもあります。この法則に従えば「北村」村となるはずなのに、なぜ北村なのでしょう？

『北村百年史』は「残念ながらこの件について触れられている記録や文書は見つかっていない」としながら、「『北村』村とすると村の字が2つ重なってしまい、語呂も良くないということも、『北』村とした理由であったと思われる」と、記しています。「北村」としている以上、村の名は「北」になるとも『北村百年史』は書いていて、開拓者にとって故郷の遙か北に建設し



初代の北村戸長役場。北村農場が寄付した餅をまいて落成を祝った。

た、我らが「北」の村という思いも込めたといのです。なんだか、ジーンときませんか。決定の時期にも興味深い事実があります。北海道庁告示は1900（明治33）年。ところが前年の1899（明治32）年、品川弥二郎という人物が、霜田教善の寺院に『超世山浄土寺』という山号を寄進した際、こうしたためています。

超世の悲願 聞きしより 我らは生死 凡夫かは
有漏の穢身は変らねど 心は浄土に住み遊ぶ

明治三十二年十一月七日 北海道石狩國空知郡北村
超世山浄土寺の為に 念仏庵やじ謹題

行政上、まだ存在していない「北村」が、既に地名となっているのです。『北村百年史』も、北村命名の決め手となったのは、この書だと断定しています。品川は、開拓が成就した暁には「北村」とするよう雄治に勧めていましたし、道庁のお役人も雄治の功績は認識していたため、「北村」の村名は当然のことと受け入れられたのでしょう。

この品川もすごい人です。天保年間に長州藩士の子として生まれ、吉田松陰の松下村塾に学び、高杉晋作や久坂玄瑞らと尊王攘夷運動に奔走。生きて明治維新を迎え、明治政府の中樞で殖産興業政策を推進しました。今、那須御用邸で知られる栃木県那須野が原は、明治の元勳や華族が農場を開いた場所で、日本遺産「明治貴族が描いた未来～那須野が原開拓浪漫譚～」にも認定されていますが、品川もここに農場を開き、小作人の自立を目指しました。品川は内務大臣として北海道長官の北垣国道とも親交がありました。

北村はジンギスカン発祥の地!?

チャレンジ精神と華麗なる人脈を併せ持っていた雄治ですが、32歳の若さで病没してしまいます。雄治の後を継いだのが5歳下の弟の北村暲でした。山梨県で雄治の酒造業を手伝った後、遠くオーストラリアへ渡り、



北村暲（1876～1960）

羊牧場で働く経験を積みました。雄治の死後、北村農場に移住すると北村戸長の公職に就き、社会貢献を課題としました。これは、事業の発展には村全体が良くなるのが大事という金原明善きんばらめいぜんの助言を受けたものです。金原は大久保利通おおくぼとしみちの知遇を得て天竜川改修工事に尽力した人物で、北海道今金町にも農場を開きました。

そんななか第一次世界大戦が勃発し、羊毛の輸入が止まってしまいます。政府は羊毛自給のために「綿羊百万頭計画」を進め、滝川や月寒など全国5カ所に種羊場を設けました。甕は、オーストラリアの羊牧場で働いた経験から、羊飼育と羊毛加工で農民の暮らしを向上させようと羊の払下げを求めましたが、経験がないとの理由で却下されてしまいます。本場の綿羊を知っているのに何ということでしょう。しかし甕は腐らず、既にドイツ人技師が綿羊を飼育しており、羊の払下げも受けていた伊達村（現・伊達市）へ、青年五名を研修に派遣。そして自力で綿羊を購入し、「農家が数頭ずつ、犬猫と思ってかわいがって育てる」という独特の信念で飼育を始めます。組合員同士の出資による北村綿羊組合も結成しました。この共同経営法を視察した農商務省局長が感動したため、晴れて国から委託飼育を受けられ、やがて北村の綿羊は全国畜産博覧会で上位を独占し、たいへんな評判となりました。

しかし第一次世界大戦の終結で輸入が再開されると、羊毛価格は急落。窮状を打破するため、甕は北村で生産された羊毛から毛織物を作るという、付加価値の創造に取り組みます。それが「ホームスパン」(Home = 家庭で、Spun = 紡ぐ) という毛織物で、まさに六次産業化です。甕は全国に先駆けて「羊毛加工講習会」を開いて技術を普及し、1924（大正13）年、北村で日

本初の純国産ホームスパンを誕生させました。その品質は高く、1925（大正14）年に全国副業博覧会で皇后陛下がお買い上げになったほどです。

さらに、羊肉を食べる習慣がなかった当時、食用での活用にも奮闘します。1920（大正9）年2月20日、北村綿羊組合の総会後に羊食会を開き、1924（大正13）年2月にはレシピ集「羊肉料理法」（東京女子高等学校一戸伊勢子考案）を作って、羊の網焼き、すき焼きなど14種の料理を紹介しました。農商務省が発表した料理レシピに中国料理「コウヤンロウ」を和風にした「羊の網焼き」が掲載されたのも同年のことです。『北村百年史』には『北村は羊肉料理発祥の地』『ジンギスカン料理発祥の地』と断言してよいのではあるまいかと、書かれています。

甕が目指したのは、小作人が自立すること。「自作農になることで、土地を愛し、生産を高め、生活を向上させることができ、郷土を愛することにつながる」と、考えたのです。しかし小作人が営農資金を蓄えるのは容易ではありません。甕は小作人に有利な条件を作ることで、北村農場の自作農創設を実現しました。甕の信念は「空気と水と土地は独占すべきでない、耕す農民に与えるべきものだ」というもの。それは兄・雄治の遺志でもありました。

一方、内陸の開発が進むなか、空知川、石狩川の水を使って1万1,100町歩を灌漑かんがいする大構想を旗印に、1922（大正11）年、北海土功組合（現・北海土地改良区）が設立されました。しかし関東大震災と重なったため資金調達に苦勞し、理事による饜きょうおう応問題が起きてしまいます。そこで白羽の矢が立ったのが、清廉な甕でした。理事就任を請われた甕は、報酬の辞退、陳情



農家の副業に甕が推進したホームスパン。



北村揚水機場蒸気機関室。

のための東京への旅費も自己負担、銀行融資の個人保証に自分の全財産をあてると宣言して理事となります。甕の実行力は折り紙付きでしたから資金を調達でき、1929（昭和4）、北海灌漑溝（現・北海幹線用水路）が完成。赤平の空知川取水口から南幌に至る約80km、農業専用用水路として今なお日本最長を誇っています。驚くべきは幹線から離れた北村は利用できず、別途石狩川から揚水しなければならなかったこと。自分の利益より、広く地域社会の利益を考える甕の思想がうかがえます。北海土功組合史に「創立以来の貢献者北村甕」と讃えられているのも当然ですね。さらに揚水の動力は当初、石炭を燃料とする蒸気機関でしたが、余剰電力を安く利用できる電力に転換する決断も、甕が下します。その際、農家が電気を利用できるよう電力会社に働きかけ、北村は早くに電灯が灯りました。

イノベーション成し遂げた3兄弟

最後に、3兄弟の末っ子、北村謹をご紹介します。謹は、札幌農学校へ進学するも病気のため中退しましたが、牛の飼育が好きで、1914年（大正3）に分家として独立し北村牧場を開きました。謹が取り組んだのは、家畜の厩肥きゅうひを活用して地力を上げて作物を作り、かつ農民自身による協同



北村謹（1882～1935）

組合を組織して産業として動かしていくデンマーク農法です。乳量の多い優良な牛を改良して「空知ホルスタインの父」と敬慕されました。また、北海道製酪販



謹の考案で、水害から牛を守るため2階建てにした牛舎。

売組合（後の雪印乳業）の役員として乳製品を広め、酪農義塾（後の酪農学園大学）の理事として、次世代を育てることに尽力しました。ちなみに謹の妻・智恵は、元函館区立弥生尋常小学校教諭で、石川啄木の同僚。啄木は『一握の砂』発刊の際に、智恵に同書を送っています。その返礼として智恵は北村牧場のバターを送りました。啄木は、そのことを歌った短歌を『悲しき玩具』に収め、北村牧場跡地には歌碑が建てられています。

石狩の空知郡の

牧場のお嫁さんより送り来し

バタかな

明治の元勳から石川啄木まで、多士済々が登場する人間模様はドラマのようですね。

こうした3兄弟の軌跡が、今年、北村地域農泊推進協議会から『北村三兄弟物語』として発行されます。執筆は、岩見沢市在住でフリーペーパー「これっと」編集長の栗林千奈美さんが担当しました。表紙の題字は「NPO法人 山の無い北村の輝き」の七戸美枝子さんの揮毫きこう、デザインは北海道教育大学岩見沢校美術文化専攻イラストレーション研究室3年の小島有世さんによるものです。俊英の力を結集して作られた本は、地域の誇りを未来へ継承していくことでしょう。今後、学校教育の場でも大いに活用されるそうです。

豊かなネットワークを巡らせ、広い視野を持ち、自分の利益より地域全体を豊かにするためのイノベーションを起こした雄治・甕・謹。地域の特性を理解して、時代の動きの中で必要な基盤整備を考え、産業を創出・振興しました。それは現代に通じる地域づくりのエッセンスに違いありません。最終回となる今回は、今まさにそれを実践している北村の人々をご紹介します。



北村地域農泊推進協議会発行の『北村三兄弟物語』。